



Title	取り立て否定形式「Vはしない」の性質と用法
Author(s)	山倉, 佐恵子
Citation	大阪大学言語文化学. 2026, 35, p. 53-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105219
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

取り立て否定形式「Vはしない」の性質と用法*

山倉佐恵子**

キーワード：助詞「は」、主題、動詞連用形

This paper argues that the topic-comment function of “wa (は)” is also maintained when used with verbs. By focusing on the form “V wa shinai (Vはしない),” which is connected to the verb’s conjunctive form, this paper demonstrates that even with verbs, a theme–comment structure is established, in which a certain entity or phenomenon is referred to in a generalized way. When a verb is used for emphasis, for example in the phrase “iki wa shinai” (行きはしない, a special emphatic form of “not go”), it can refer to the act of going in general rather than to a specific instance of going at a particular time or place. By arguing that “as long as an entity qualifies as X, it is interpreted as non-X, this paper offers an explanation for previous studies that have cited cases in which a contrast cannot be discerned in the context and examples of “negative emphasis” whose relationship to contrastive usage has been left unexplained. The topicality of “V wa shinai (Vはしない)” is particularly evident when the scope of comparison marked by “wa (は)” is broadened to cover all objects.

1 はじめに

日本語の助詞「は」の用法といえば、主題と対比と呼ばれる2つがある。主題の「は」とは、簡潔に言うところ「その文が何について述べるのかを示すもの」であり（日本語記述文法研究会〔編〕（以下、日文）、2009）、例えば「車は便利だ」は「車」について言うと、それは「便利」だを示すということである。

(1) 車は便利だ

(2) 雪は白い

このように主題の「は」というのは、基本的に、名詞または名詞句に関するものとされる。これは主題の「は」とは説明の対象を指すものだという定義に基づく。先行研究では、説明の対象とは名詞でなければならないとされている。

(3) 「○○ハ」の○○が名詞句の場合に限って主題ということにする。確かに、

* A study of the negative form “V wa shinai” (YAMAKURA Saeko)

** 大阪大学人文学研究科言語文化専攻 博士後期課程

〇〇が名詞句でなくても、前後間で表現上の立場の落差を帯びる表現があるが、それは主題に含めないことにする。(中略) 後続の伝達主要部で説明が与えられるモノとはいえないことが、その理由である。(堀川, 2012:9)

それに対して、対比の「は」は「太郎は学生だ」における「太郎」を「花子」「次郎」など他と比較して述べるものである。例えば先程の日文(2009)では「文中のある要素をとりたてて、それと同類のものとの違いを示すことである。」(日文, 2009)のように定義される。

- (4) あの車は便利だ
- (5) 彼は英語は得意だ。
- (6) コーヒーは好きだが、牛乳は嫌いだ。
- (7) 太郎さんのマンションは新しくはない。

しかし(8)(9)のような例は従来の対比の意味からは説明がし難いものとされる。それは背景情報を考慮すると対照されている他の内容や必要性が見当たらないということであったり、対比からなる既存の動詞接続の用法とは異なることを意味する。

- (8) 知っていれば、雨が降るのに、岩の向こうのほうまで行きはしないわ。
(青木, 1992:274)
- (9) わたしは決して前川正を忘れてはいない。(青木, 1992:335)
- (10) 老婆は線香の用意さえしてはいなかった。(野田, 1995:165)

ここで一度、今まで論じられてきた「主題」の意味について視点を変えてみる。主題の定義というのは様々あり、広義にとれば「談話・テキストの次元の概念としてとらえるべきものだ」(堀川, 2012:18)ということもできる。これはただテキスト上既出だというだけではなく、話し手や聞き手など参加者の存在を含め情報構造上の概念として論じられる。

- (11) 「旧情報 (topic of the sentence) は話に参加する者同士が既に共有している情報であり、この情報が新情報を理解する上での出発点とも言える環境を提供する」(メイナード, 1997:101) ¹

もし主題を話し手や聞き手などの参加者に注目される情報と捉えた場合、品詞を限定する必要性はなくなるだろう。そして参加者が共有する情報であり、会話の出発点であ

¹ ここでは「Chafe (1970) にとってトピックは古い情報をマークする手法である。」(メイナード 1997:101) ということを解説する上で、旧情報とトピックの説明を同一のものとして述べている。引用文中の (topic of the sentence) の追記は著者による。そしてもう一つ留意点として、既知とは認識上の概念であり実際の会話では「話者が「参加者と共有している」と認識している情報」ということに注意する必要がある。談話上に言及されおらず、また実際は聞き手にとって意識の外にあることであろうと、話し手が「聞き手が理解している」と意識していることが重要なのである。

るという点は「動詞」＋「は」の場合にも観察できる性質である。

(12) a「もうお別れね。二度と会わないと私のことなんて忘れるんじゃない」

b「忘れるはずがないよ」

a「本当に忘れない？」

b「忘れはしないさ」

このような場合「忘れはしないさ」の「忘れ」が指す「忘れること」はAとBにとって話題の中心だと言えるだろう。このように主題がもつ主題—解説の機能も動詞接続の「は」にもあるというのが本論の主張である。この場合の機能というのは、物事を「一般に～について言えば」ととらえることを指す。例えば「車は便利だ」は「一般的に車について言えば」ということである。それが「あの車は便利だ」のように特定の車であれば、比較する事項が暗示されやすく対比になりやすくなる。このようにそもそも主題と対比というのは、寺村（1991）、尾上（1995）が主張するように対比性の働き方の差だと思われる。

(13) 本書では、「ハ」の、文中である要素をとくに際立たせ、ある対比的効果を生じさせる効果を基本と見、それがある条件下で、対比の相手である影の存在が意識されず、単にそこに聞き手の注意を特に惹きつけて、あとの陳述と結びつけるだけの場合を「(単なる) 主題」を表すものとする。
(寺村, 1991:41)

(14) 「ペンギンは鳥だ。」という文が「ハ」によって成立承認されているゆえに身に帯びている文単位の排他性の、その排他相手が語られなかったすべての事態に拡散してしまうとき、言い換えて、世界の中で唯一スポットライトを当てたこの事態の、その背景にある闇のすべてを敵にまわした排他性を「ハ」が支えているとき、「ハ」の分説性、排他性は、文一般に内在する根源的排他性の中に解消されてしまつて、人はそこに排他、対比の色を感じなくなるのである。(尾上, 1995:30)

より広げて言えば、対比は「XはY」の「X」と他の事物における対比、「車は便利だ」における「車」「自転車」「電車」などの比較であり、主題は「XはY」の「X」と「Y」の関係における対比だということである。主題における対比性は「車は便利だ」では「車」と「便利だ」の繋がりを再確認するものという、対比の方向性の違いである。そのため対比的であることが、ただちに主題ではないことにつながらないと考える。

本論は動詞に対して働く「は」が主題の性質を保持しているということを主張することが目的である。特に「動詞連用形」＋「は」＋「ない」（例：行きはしない、知りはしない、等（以下、Vはしない））の形において、主題（説明対象）—解説（説明）の

関係が築かれ「一般にXについて言えば」という属性を示している場合があるとする。「眼前のXについて」ではなく「一般にXについて」と述べることで、つまり「ある時点・場所の「行く」について」ではなく「一般に「行く」について」と指すことは、「行く」を「(私が私である限り)「行くこと」について言う」と「しない」ものである」という時や場所に左右されない属性だと解釈ができるのである。そのために「否定の強調」という用法がつながっていることを、談話による背景情報を含めた説明対象や状況の確認により分析していく。

2 主題と対比の「は」

では「Vはしない」が主題であると主張するにあたって、主題と対比の定義と本論の立場を明確にしていきたい。「主題」は一文上の概念とする立場や談話上の概念とする立場があるが、特に本論で重要視する主題性は説明且つ前提であるということである。それは尾上（1995）などにおける主題の定義、「表現伝達上の前提部分」「後続部分の説明対象」に着目するということである。

- (15) ① 一文の中で、その成分が表現伝達上の前提部分という立場にある
- ①-a 表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある。
- ①-b その成分は、後続の伝達主要部分の内容がそれと決定されるために必要な原理的先行固定部分である。
- ② その成分が、後続部分の説明対象になっている。（尾上, 1995:31）

尾上（1995）の①が示す、前提とは次のような説明を含む。

- (16) 「AはB」という分説的承認は、AがAであるからこそBと結びつく、前項がAでなければ後項はBとは言えないという関係を語るものである。AがAである限りにおいて、いわばAがAであることを条件として、Bが言えるのであるから、認識としてはAがBに先行することになる。「ペンギンは鳥だ」という文は「ペンギン」を主語とするから、「鳥だ」ということになるのであり、ちがうものを主語にとったら述語が「鳥だ」になる保障はないというあり方を帯びている文である。（尾上, 1995:34-35）

これは文が成立した時の前提であるということから、1節であげた既知性に重ねたい。尾上（1995）では②についての言及は限られているため、本論では堀川（2012）にならい、属性形容詞における主語と述語の関係に準ずるものだと考える。説明とは、XとYが「雪は白い」のように説明対象—説明の関係を結び、Yは属性を示すということだとする。例えば「雪は白い」を例にすると雪というものの一般について述べ、それは白いと

属性を付している。属性には時間的、場所的な雪自体を特定する要素は含まれない。雪を現実世界の要素と結びつけ、「昨日の雪」や「青森の雪」など具体的なものについて指摘しているわけではない。あくまで雪に共通する性質を示しているのだ。言い換えれば「(時・場所などを問わず)雪は白い(ものだ)」と示すことに近い。

そして対比とは1節で述べたように、「は」が「XはY」の「X」を同類のものと対照して示すものだと考える。

- (4) あの車は便利だ。
- (5) 彼は英語は得意だ。
- (6) 山田さんの家は新しくはない。
- (7) コーヒーは好きだが、牛乳は嫌いだ。

(5) (6) などは、対比により「英語は得意だ(が、数学は苦手だ)」「新しくはない(が、安い)」などを暗示させる。(7) のような比較対象を明示する形は対比の典型的な例であり、コーヒーと牛乳を比較している。

3 動詞連用形+は+ない

それでは今回の目的である「Vはしない」の先行研究を見ていきたい。1節で述べたように、動詞の前項を否定している場合は対比性の働き方という観点で論じられてきた。まず山崎(1982)が、「は」がある場合は、「は」がない場合に比べて、「ない」の否定の範囲が広いことを明らかにする。

- (17) *私はこの写真をパリで〔撮ら〕なかった。

私は〔この写真をパリで撮り〕はしなかった。(山崎, 1982:118)²

これにより「Vはしない(撮りはしなかった)」は「撮らなかった」のような普通の否定とは異なり、「パリ」や「この写真」に対する他の項目「ロンドン」や「あの写真」などを対比的に暗示できることがわかるようになる。次に青木(1992)では対象の例文の背景を踏まえ、対比が作中から読み取れない例において、対比の「は」とすることに議論の余地が残ることが指摘されている。

- (8) 知っていれば、雨が降るのに、岩の向こうのほうまで行きはしないわ。(青木, 1992:274)
- (9) わたしは決して前川正を忘れてはいない。(青木, 1995:335)
- (18) 局には通話回数の記録が残るだけで、話の内容なんかわかりはしない。(青木, 1992:334)

² 括弧は筆者による。原文中での「ない」の作用域を示す。

上記のような例は対比が比較する対象を捉えることができず、普通の否定(「わからない」等)との違いが不明だとされる。そして野田(1995)では「は」の対比性により動詞の意味にスケールがあることを明らかにした。「Vはしない」はスケール上で極端な例を否定する用法だと述べる。

(19) 「一応はまだ安定剤が効いていますし、呼吸も乱れてはいませんが」

(19) では「呼吸が乱れている」ことは一応否定されているが、完全に危機を脱した状態ではないことも示されている。つまり図1のスケールCに至っていることが否定されているとともに、Aではないことも示されている。

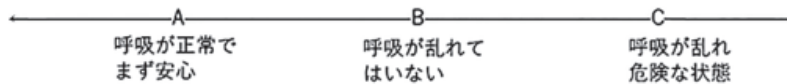


図1 野田(1995:164)

このようにシハシナイはスケール上のある段階に達していることを否定するとともに、その逆の段階ではないことも示すことができる。(野田, 1995:163-164)

しかし野田(1995)では、スケールの定義だけではまだ説明の余地が残るとして、青木(1992)で指摘された用例や次のような例をあげている。

(10) 婆は、線香の用意さえしてはいなかった。(野田, 1995:165)³

これらは「否定の強調とでも呼ぶしかないような用法」(野田, 1995:165)とされた。

本論ではこのような「は」、すなわち対比を用いることの必要性が読み取れない、または「否定の強調」となるような用法を再考し、「Vはしない」の機能を「主題」つまり一般的な内容に対する属性を描写することに求めていく。

4 「何も」「誰も」を含む「Vはしない」

まず1節で述べた主題と対比の分化の理論から、対比性は比較対象が他のあらゆる事物にまで広がるにつれて薄くなるということを前提とし、「Vはしない」の性質について分析していきたい。まず汎称的に物事を否定する「何も」「誰も」を含む例を考える。

(20) a. 誰も知らない

³ 他に言及された例は青木(1992)の(9)(18)と共通。

b. なにも知るまい

「誰も知らない」を例にとって説明するなら、「x－知らない」のx項にどんな人物が代入されてもこの事態が成り立つことをもって結局は「すべての人が知らない」という汎称的な事態を表現する（尾上, 1983:417）⁴

否定の対象があらゆることだというのは、主題の対比性があらゆることに広がるように、対立する事項が意識されにくいと考える。ただ、留意点として、主題は原理的に先行し説明の対象でなければならないため、基本的に不定語は認められていない要素だということがある。（堀川, 2012）（寺村, 1991）。

(21) *誰もは知らない

(22) *何もはない

「誰も」「何も」などは、固定的な指示対象がなく、後続の範囲を限定することができないためである。しかし、「何もありはしない」のように動詞に接続している場合は、その様相は異なるのではないだろうか。

(23) a 「突然いなくなった婚約者の SNS が消えている。

誰か知っていればいいのだが。」

b 「彼は詐欺師だったそうさ。誰も知らないだろう。」

a 「誰か知っているかもしれないじゃないか。」

b 「誰も知りはしない。」

この「誰も知りはしない」における「は」は、「誰か知っているかどうか」を示す部分に接続している。a と b 両者の認識の上に上っており、先行固定的である。説明の対象としては

(24) 「「誰かが知っている」ということについて言うと、それは「ない」ものだ」と解釈することができる。内容を先行固定的に表すという点は、反語に類する例で通常のない形と比較するとよりわかりやすい。

(25) 誰が知っているというのだろうか

誰も知らない。

(26) 誰が知っているというのだろうか

誰も知りはしない。

(25) の例は反語というには最初の節と「誰も知らない」の節のつながりが見えづらいが、「誰も知りはしない」の方は「誰かが知っているかどうか」が既知情報であることを感

⁴ 例文番号は筆者による編集。

じることができる。「何か」「誰か」の意味はたしかに不定語だが、「誰か知り…」の形式をとるように動詞の内容を含むことで、「誰かが知っていること」という修飾可能な対象となるのである。「誰かが知ること」や「何かがあること」などが、談話の中で話の中心であると考えられる例を観察してみたい。

- (27) ノラ 誰か来たやうだ（廊下の方へ行つて、聞耳をたてる）誰も来やしない。今日はクリスマスだから来る人はないだらう。明日だつて来やしない。けれども、ひよつとすると——（扉を開けて外を見る）さうぢやなかつた、郵便箱には何もありはしない、空つぽ（前の方へ出て来て）私、馬鹿なことを考へるわね。あいつ私を嚇かさうと思つてゐるに違ひない。そんなことになる氣づかひはありやしない。できないことだもの。だつて私には子供が三人もゐるぢやないか。（島村抱月（訳）『人形の家』）

これはヘンリック・イブセン「人形の家」のノラのセリフである。彼女は秘密を暴露するという内容で、夫の銀行の弁護士から脅されている。弁護士からのコンタクトは彼女にとっては恐ろしいものである。彼が来るかどうか、手紙などがあるかどうかは、意識の中心にある。そういった「（彼からの）何かがあること」という内容がまず談話の中心となっている。そして「何かがあること」は「ない」とわかることで、その後のセリフは心配からいったんは解放されたものになる。

- (28) 自分は信号灯なのだ。信号灯として、できるだけのことをするよりしかたがないのだ、新しいくつを買ってやることも、あんな春色のドレスをきせてやることも、いっしょにくらすことも、なんにもできはしないのだと、ファイヤーはさとりました。（BCCWJ）

(28) の例はファイヤーという信号灯が主人公の話である。彼は自分の横断歩道を渡る小学生に恋をし、好かれるために努力を試みる。しかしカラスに諭され自分の恋は無謀なものだと痛感する。彼はずっと以前から彼女に恋をし、「彼女に」または「彼女と」「何かができること」を願っていた。彼の意識の中心は、無限に広がる「彼女と何かができること」にある。「新しいくつを買ってやること」「いっしょにくらすこと」などさまざまな可能性を含む「何かができること」が説明対象であり、それに対して「ない」が結びつく。

5 先行研究の用例における「Vはしない」の分析

ここからは先行研究で述べられた「Vはしない」の例が、「は」が主題—解説の関係を結ぶことで使用される意味が明らかになることを観察していきたい。次の例は青木（1992）であげられていた『波』（山本有三）の一節である。主人公・行介は、世話になっ

ている女性の妹である襲子と療養先のある町の海で偶然出会った。彼女も仕事でその町に来ていたようだ。彼は最初に出会った日から数日、彼女に会えることを期待して、海に行ったが会えずにいた。既に家がある東京にもう帰ったのかと思い、自分も東京に戻ることに決めた。旅立つ前に海に向かうと彼女らしき姿をみかけた。襲子が話しかけてくる。

(29)「やっぱりあなただったのね。一きょうは、これ、やらなかったの。」

彼女は手でつりあげるまねをした。

「雨がふってるんでね。」

「そう、あたし、あそこまで行ったのよ。」

「それはお気の毒様だったなあ。ほくはまた、君はもうとうに帰ってしまったものと思っていた。」

「いゝえ。あした帰るのよ。それで、おいとまごいのつもりで行って見たら、あなたがいなかったんで、悲観しちゃったの。」

「それなら、ほくのところへきてくれればよかったのに。」

「まあ、憎らしい。居どころも知らせてくれないくせに。」

「いや、そんなことはない。ほくはちゃんと、言っておいたはずですよ……」

「知っていれば、雨がふるのに、岩の向こうのほうまで行きはしないわ。⁵⁾」

(山本有三『波』)

ここでも「行きはしない」は「(彼女が) 岩の向こうのほうまで行くこと」について「しない」という説明と説明対象の関係を築いているのだということを主張したい。彼女は実際の「行く」について話をしているのではなく、「私が岩の向こうのほうまで行く」ということを出来事の種類として性質を述べているのである。もし彼女の発言「岩の向こうのほうまで行きはしないわ。」が「岩の向こうのほうまで」という距離を対比する場合は「岩の向こうのほうまでは行かないわ。」でかまわないはずである。そのような対比ならば、それは特定の「行く」の距離の程度を説明しているだけにすぎない。『「岩の向こうのほうまで行く」ことは『しない』ものだ』であれば、「(私が) 岩の向こうのほうまで行くこと」が襲子にとって注目に値する情報であり、それが一般化され「ない」という性質が与えられると、「私は岩の向こうのほうまで行くことはしないような女なのだ」のように述べることにつながる。

しかし彼女は「あたし、あそこまで行ったのよ。」からわかるように、実際には岩の

⁵⁾ 下線は筆者による編集。

方まで行っている。それは「岩の向こうのほうまで行かない」という性質をもつ女が、「普通なら私は岩の向こうのほうまで行かない女なのにあなたがいると思うから行った」ということになる。この発言には、襲子にとって行介が自分の属性と反する行動を行わせる価値があることを含む。相手に価値があると伝えるということは、相手に良い印象や好意をもっていることを伝える意味につながる。実際に襲子はこの後読み進めると、行介に愛を告白する。「岩の向こうのほうまで行きはしない」を属性描写文であると解釈することは、彼女が性質を通してこの時点でも好意を伝えていることにつながる。

次は野田（1995）、青木（1992）で指摘された「局には通話回数の記録が残るだけで話の内容なんかわかりはしない」について、同様に観察していく。ここでは主人とその姉・ダイヤモンドという二人の人物が会話している。主人は、ある芸者が逃亡してその叔父を名乗る人物から少年保護法などで訴えたと脅しを受けたことに悩まされている。彼女は問題を解決するために外部の人間に根回しをしようとしているが、話が複雑なため会って相談しようとする。だがダイヤはそんな主人を叱責する。

- (30) 話がこみいつているから会って話したほうが早いと云う主人を、ダイヤは姉ぶってけなしつける。「出て行けば往来でも誰かに見られるし、行ったさきのうちのものにも会うから、工作しに出かけたという事実は何人もの眼で証拠に残っちゃうわ。電話ならそんなからくりはした覚えがないって云いはれるでしょ？そこが手動式電話の利用価値っていうものさ。局には通話回数の記録が残るだけで話の内容なんかわかりはしない。⁶」（幸田文「流れる」）

ここで「は」が取り立てているのは、「話の内容がわかり」が指す「話の内容がわかること」である。「話の内容」の内実は文脈から読み取れるように、問題解決のための外部への工作の依頼である。「話の内容（工作を依頼したこと）がわかること」について言うとそれは「ない」ものだというのがここでの意味となる。これによって「話の内容がわかる」と「ない」の関係は、時・場所に左右されない属性として解釈される。「話の内容がわかり」と「ない」がある種の普遍性をもつことによって、強調という効果につながるのである。

6 「Vはしない」のみの用例の分析

以上のように、先行研究で取り上げられた例を概観したが、これら用例では「も」や「なんて」など、それ自体が強調を表すとされる語などとの共起があった。「Vはしない」

⁶ 下線は筆者による編集。

がもつ強調の意味合いが、これらに依存するものではないことを確かめなければならない。そのような事物との比較を促す形で強調を示す語句との共起の無い「Vはしない」の例でも、同様に主題―解説の関係を築き、それが「否定の強調」の意味につながることを分析していく。

(31)「この女は羅馬へ行くつもりなんですか」

女は腑に落ちぬ不快の面持で男の顔を見た。小野さんは「クレオパトラ」の行為に対して責任を持たねばならぬ。

「行きはしませんよ。行きはしませんよ。」

と縁もない女王を弁護したような事を云う。

「行かないの？ 私だって行かないわ」と女はようやく納得する。(夏目漱石「虞美人草」)

ここでは女性と小野さんという人物が会話している。女は小野さんが読んでいた本を取り上げ読み始めた。そして内容について「この女は羅馬へ行くつもりなんですか」と質問を切り出す。背景を理解するために本の内容にも触れていきたい。この本「プルターク英雄伝」では、クレオパトラとアントニーとの恋愛、オクテヴィアス・シーザーとの戦争が書かれている。クレパトラ達はシーザーに敗れ、彼女は戦利品としてローマに連れて行かれることになる。「虞美人草」では、クレオパトラが死んだアントニーを思いながら嘆くセリフが引用されている。

「虞美人草」の女性はこの場面を読みながら、小野さんにクレオパトラはローマに行くつもりかと聞いている。ここでの小野さんの返答はクレオパトラの行為に対して責任を持つものであり、女性の納得を促すものである必要がある。最終的にクレオパトラはローマに行く前に毒蛇を用いて自殺することにも留意したい。文脈上、小野さんの「行きはしませんよ。行きはしませんよ。」には強さが必要なことが担保されている。

ここでも今まで述べたように「Vはしない」は主題―解説の関係を築いていると考える。「(クレオパトラがローマに) 行くこと」ととらえ、「しない」をその性質として述べるものとする。ここにおける「行く」と「ない」の結びつきは、現実世界に紐づけられるものではない。今この場の「行く」だけを否定しているわけではないということである。「行きはしない」はその属性をもつ対象がそうである限り、すなわち「(彼女が) 行く」が「(彼女が) 行く」である限り、時・場所を問わず変わることのない性質なのである。個別的な事象ではなく説明の対象としてとらえることが、その否定の強さにつながる。

このように「Vはしない」が主題と解説の関係を保ち、事態に対する属性を示すこと、それにより「否定の強調」を表すことを示す。そしてこれが「も」「なんて」などに影

響によるものではないことが明らかとなる。

7 まとめ

以上のように、本論文では「は」が主題の性質を保持しているということを主張してきた。特に「Vはしない」を主軸におき、主題（説明対象）—解説（説明）の関係を築くことを明らかにした。「は」の対比と主題の違いは、説明対象のとらえ方に結びつき、動詞を取り立てる場合も「ある時点・場所の『行く』について」ではなく「一般に『行く』について」と指すのである。そして「その属性をもつ対象がそうである限り、それは『ない』ものだ」と主張することにより「否定の強調」という用法につながっていく。

今後の課題として「Vはしない」とモダリティ表現とのつながりをあげたい。「Vはしない」は方言形式の場合モダリティとしての性質があることが指摘されている。そこで言及される意味も、今回の主題性と関わりのあるものなのではないかと考える。

参考図書

- 山本有三（1971）『波』講談社
- 幸田 文（1980）『流れる』『流れる・闘』新潮社
- 夏目漱石（1988）『虞美人草』『夏目漱石全集4』ちくま文庫 青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/761_14485.html（最終閲覧 25/9/15）
- Ibsen, H. (1879). *Et Ddukkehjem*. (イブセン, ヘンリック. 島村抱月 (訳) (1952)『人形の家』角川文庫) 青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/001028/files/4797_31829.html（最終閲覧 25/9/15）

参考文献

- 青木玲子（1992）『「は」の構文論的研究』笠間書院
- 尾上圭介（1981）「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58-5
- 尾上圭介（1983）「不定語の語法と用法」『副用語の研究』明治書院
- 尾上圭介（1995）「「は」の意味分化の論理—題目提示と対比—」『言語』24-11
- 久野 暁（1973）『日本文法研究』大修館書店
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 丹保健一（1985）「「車は急に止まれない。」について—不自然さの諸要因—」『三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学』36
- 日本語記述文法研究会〔編〕（2009）『現代日本語文法5』くろしお出版
- 野田晴美（1995）「「～ハ～ナイ」「～シハシナイ」「～ノデハナイ」「～ワケデハナイ」

- 「ハとナイを含む否定の形」『日本語類義表現の文法（上）』 くろしお出版
- 堀川智也（2012）『日本語の主題』 ひつじ書房
- メイナード，泉子・K（1997）『談話分析の可能性：理論・方法・日本語の表現性』 くろしお出版
- 山崎和夫（1982）「「～ない」の作用域について」『言語』 11-11
- 山西正子（1987）「「だれも」考」『国語と国文学』 64-7
- Chafe, W.H. (1976). "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics and points of view." In *Subject and Topic*, ed by Chafe, W.H., New York: Academic Press